

命の収獲

テス・ジェリッツェン

浅羽英子＝訳

HARVEST

Tess Gerritsen

Tess Gerritsen

REVEST

江苏工业学院图书馆
藏书章

命の収獲

テス・ジェリッツェン

浅羽英子＝訳

角川書店

命の収穫



1997年5月30日 初版発行

著者／テス・ジェリッツェン

訳者／浅羽英子

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 00130-9-195208

TEL 営業03-3238-8521 編集03-3238-8555

印刷所／凸版印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

Printed in Japan

ISBN4-04-791269-7 C0397

命の収獲

HARVEST

by

Tess Gerritsen

Copyright © 1996 by Tess Gerritsen

Japanese translation rights arranged with

POCKET BOOKS

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

Translated by Sayako Asaba

Published in Japan

by

Kadokawa Shoten Publishing Co., Ltd.

夫で一番の親友の
ジャックに

謝 辞

心からの感謝を、やさしく洞察に充ちた編集をしてくれたエミリー・ベスラーに、ロシア・マフィアの専門知識を分けてくれたデヴィッド・ボウマンに、臓器移植手続きに関する貴重な洞察を与えてくれた移植コーディネイターたち、すなわちペノブスコット・ベイ医療センターのスーザン・プラットおよびメイン医療センターのブルース・ホワイトに、医学図書館コンピュータの操作を手伝ってくれたパティ・カーンに、錠前造りに関する助言を与えてくれたメイン州ロックランドのジョン・サージェントに、そして資料をたゆみなく送り続けてくれたロジャー・ペパーに捧げます。

そして何よりも、ジェイン・ロストロン・エージェンシーのメグ・ルーリイとドン・クリアリイに特別の感謝を。あなたがたのおかげでやれました。

へ主な登場人物へ

アビー・ディマテリオ

ベイサイド病院二年目外科研

修医

マーク・ホーデル

胸部外科指導医

心臓移植チ

ームの外科医

ヴィヴィアン・チャオ

外科主任研修医

天才女性外

科医

コリン・ウェティグ

専門研修プログラム責任者

元陸軍軍医総監

ビル・アーチャー

心臓移植チーム主任

アーロン・リーヴァイ

心臓移植チーム 心臓病専門

医

カレン・テリオ

アビーの脳死患者

ニーナ・ヴォス

心臓病患者

ヴィクター・ヴォス

ニーナの夫 資産家

メアリ・アレン

末期癌患者

ブレンダ・ヘイニー

メアリ・アレンの姪

ジョシュ・オデイ

鬱血性心不全患者

ジェレマイア・パー

ベイサイド病院院長

アイヴァン・タラソフ

マサチューセッツ総合病院

移植チーム主任

スチュワート・サスマン

弁護士

スーザン・カサード

ベイサイド病院顧問弁護士

エレイン・リーヴァイ

アーロンの妻

バーナード・キャツカ

殺人課刑事

ヤーコフ

ロシア人孤児

アレクセイ

ロシア人孤児

グリゴリー

ロシア・マフィア

ナデイヤ

ロシア・マフィア

少年は歳の割に小さく、アルバツ・カヤの地下道で物乞いをする他の子供に較べても小柄だったが、弱冠十一歳で既に何もかも経験してしまっていた。煙草を吸いだして四年、盗みを始めて三年半、体を売って二年になる。この最後の仕事は、ヤーコフ自身はあまり好かないのだが、ミーシャおじさんがやれと言つてきかない。やらずにどうやってパンと煙草を買えと言ふのだ？ ヤーコフはミーシャおじさんの男の子のうち、最も小柄で最も金髪だったため、商売の大半を引き受けさせられていた。客はいつも、若い子、色白な子ほど好む。ヤーコフに左手がないことも気に留めない。それどころか、おおかたは羨びた手首に気づきもしない。少年の小ささ、金髪ぶり、決してたじろがない青い眼に夢中になって。

ヤーコフは早くこの商売を卒業し、年嵩の少年たちのように、掏摸で食いぶちを稼げるようになっていたと願っていた。朝はミーシャのフラットで眼を覚ますとすぐに、夜は眠りに落ちる前に、一つしかないまともなほうの手を伸ばし、簡易ベッドの頭の横棒を掴む。身長に一センチの何分の一かが加わることを期待して、思いきり体を伸ばす。むだなことだ、とミーシャおじさんには助言された。ヤーコフが小さいのは、もともと小柄な血統だから。七年前にモスクワでヤーコフを捨てた女も小さかった、と。ヤーコフ自身はその女をろくにおぼえておらず、都会に来る以前の生活についても、思い出せることは皆無に等しい。知っているのはミーシャおじさんが教えてくれたことだけで、それすら半分は信じていない。まだ十一歳と幼いながら、ヤーコフは小さいだけでなく賢かったのだ。

したがって今も、食卓をはさんでミーシャおじさんと商談をしている男女を見る眼には、生来の懷疑的なものが籠もっていた。

この男女二人連れは、窓を暗くした黒い大型車でフラットにやつて来た。男はグリゴリーという名で、背広にネクタイを締め、本物の革の靴を履いていた。女はナディヤといい、金髪で上等のウールのスカートと

上着を着込み、硬い材質でできた書類袍を提げていた。女のほうはロシア人ではない——その点だけは、フラットにいた四人の少年にはすぐにわかった。アメリカ人もしれない。またはイギリス人。流暢なロシア語を話すが訛りがある。

男二人がウォッカを飲みながら商談をする間、女の視線はちつぽけな室内をさまよい、壁際に押しつけられた陸軍放出の古い簡易ベッド、汚れた寝具の山、そして固まって不安に黙りこくっている四人の少年を見て取った。淡い灰色の眼、美しい眼で、少年たちを一人一人、順に検討した。まず十五歳で最年長のピョートルを見た。それから十三のステパンと十歳のアレクセイ。

そして最後にヤーコフを見た。

大人にそうしてじろじろ見られることに馴れていたヤーコフは、落ち着き払った眼で見つめ返した。馴れていなかったのは、あつさり視線を移されること。普通の大人は他の少年には眼もくれない。だのに今度ばかりは、女の注意を独占したのは、ひよろ長くてにきび面のピョートルだった。

ナデイヤはミーシャに言った。「こうするのが正しいのよ、ミハイル・イザイェヴィッチ。ここにいたら、

この子たちに未来はない。わたしたちはすばらしい機会を与えてやろうとしてるの！」少年たちに微笑みかける。

頭の鈍いステパンが、恋をした腑抜けのようににやつき返す。

「わかつてると思うが、どの子も英語は喋れないんだぜ」ミーシャおじさんは言った。「単語をひとつずつ知ってるだけで」

「子供はおぼえが速いから。努力しなくてもおぼえられる」

「馴れる時間が必要だ。言葉も、食べ物も——」

「移住初期に何が必要かぐらい、うちの紹介所はよく知ってます。ロシア人の子供なら大勢扱ってきてるしみんな、この子たちと同じ孤児よ。適応する時間とされるよう、しばらくは特別な学校に寄宿するの」

「適応できなかったら？」

ナデイヤは口ごもった。「ごくたまに例外はあるわ。情緒的に問題のある子で」四人の少年に眼を走らせる。「特に気がかりな子でもいるの？」

二人の言う問題のある子は自分だと、ヤーコフは知っていた。滅多に笑わず決して泣かない子、ミーシャおじさんが「石でできたやつ」と呼んでいる子。なぜ

泣かないのか、ヤークコフ自身にもわからない。他の少年は傷つくと、大粒の涙をだらしく流す。ヤークコフは頭の中を真っ白にしてしまう。深夜、放送局が仕事を終えたあと、テレビの画面が白くなるように。放送もなければ映像もなく、心慰められる白い砂嵐があるだけ。

ミーシャおじさんは言った。「みんないい子だ。立派な子ばかりさ」

ヤークコフはあとの三人を見た。ピョートルは眉^{まゆ}びさが突き出、肩がゴリラのようにいつも前に怒^{いか}っている。ステパンは両方の耳が小さく、皺^{しわ}の寄ったおかしな形をしていて、その間に脳^脳味噌^{味噌}代^代わりの胡桃^{くるみ}が挟^{はさ}まっている。アレクセイは拇^{おやび}指^さをしやぶっていた。

そしておいらは、と切株のような前腕を見おろして思った。おいらには手が一つしかない。どうしておいらたちのこと、立派だなんて言うんだろ？　だがミーシャおじさんはそう主張し続けている。女もうなずき続けている。いい子たちだ、健康な子たちだ、と。「歯だつていい！」ミーシャは指摘した。「虫歯なんぞ一本もない。それにうちのピョートルの背の高いこと」

「そつちの子は栄養不良みたいだぜ」グリゴリーがヤ

ークコフをゆびさす。「それに手はどうしたんだ？」

「生まれつきなかったのさ」

「放射能のせいかな？」

「他の点じゃ影響はない。片方の手がないだけだ」

「問題にはならないわ」ナディヤが立ち上がる。「もう行かないと。時間よ」

「もう？」

「こつちにも予定があるんで」

「だが——この服じゃ——」

「服は紹介所が支給します。今着てるものよりはましよう」

「そんなに慌しくする必要があるのか？　さよならを言う時間もないのかい？」

女の眼に苛^{いらだ}立ちの波が走った。「じゃあちよつとだけ。乗り遅れるとまずいから」

ミーシャおじさんは少年たちを見た。血でもなければ愛情でさええない、互いに依存し、互いに必要とすることで結ばれてきた、おじさんの四人の少年たち。順番に一人ずつ抱きしめる。ヤークコフの番になると、他の子より少しだけ長く、少しだけきつく抱きしめた。ミーシャおじさんは玉葱^{たまねぎ}と煙草^{たばこ}の匂^{にお}いがした。嗅^かぎ馴^なれた匂い。いい匂い。だがヤークコフは本能的にその親

密かにたじろいだ。誰に抱かれるのも触れられるのも嫌いだ。

「おじさんを忘れるんじゃないよ」ミーシャは囁いた。
「アメリカで金持ちになつても。おじさんがお前を見守つてきたこと、思い出してくれよ」

「アメリカなんか行きたくない」ヤークフは言った。

「これが一番いいんだ。お前たちみんなにとつて」

「おじさんと一緒にいたい！ここにいたい」

「行かないやだめだ」

「なんで？」

「俺がそう決めたからだ」ミーシャおじさんは少年の両肩を掴み、強く揺さぶつた。「俺が決めたんだ」

ヤークフはにやつき合つている他の少年たちを見た。そして思った。みんな喜んでる。なんでおいらだけ迷つてるんだろ？

女がヤークフの手を取つた。「わたしが車まで連れてくわ。グリゴリーは残つて書類のほうすませて」

「おじさん？」ヤークフは呼びかけた。

だがミーシャは既に背を向け、窓の外をじつと見ていた。

ナディヤは四人の少年を廊下に追い立て、階下に向かわせた。通りまでは三階ある。いくつものどた靴、

少年たちの騒々しいエネルギーの全てが、からつぽの階段にやかましく跳ね返つて感じられた。

アレクセイがいきなり立ちどまつた時、一同は既に一階にたどりついていた。「まって！ シュシュわすれちゃつた！」と叫び、階段を大急ぎで駆け上がりだした。

「戻りなさい！」ナディヤが呼ぶ。「上がつちやだめ！」

「おいてけないもん！」アレクセイが怒鳴る。

「今すぐ戻つてくるの！」

アレクセイはそのままだとたどたどた上がつていった。女が追いかけてようとした時、ピョートルが「シュシュなしじゃ行きつこないよ」と言つた。

「シュシュっていつたい誰よ！」ナディヤは咬みついた。

「あいつのぬいぐるみの犬。ずっと持つてるんだ」

女は四階のほうを見上げたが、その一瞬、ヤークフはナディヤの眼に理解できないものを見た。

不安。

立ちつくしているさまは、追いかけるかアレクセイを放棄するか、板ばさみになつてゐるかのようだった。少年がぼろぼろのシュシュを両手で抱きかかえて駆け

おりてくると、女は安堵のあまりとけたように手すりに寄りかかった。

「とつてきた！」アレクセイはぬいぐるみを抱きしめ、勝ち誇つて叫んだ。

「さあ行くの」女が全員を外に押し出す。

少年四人は車の後部座席に乗り込んだ。ゆとりがなく、ヤーコフはピョートルの膝に半分腰かける羽目になつた。

「この骨つばいけつ、どつか他に置けないのか？」ピョートルがこぼす。

「どこに置きやいいんだよ？ お前の顔か？」

ピョートルが押した。押し返す。

「やめなさい！」前の席から女が命じた。「おとなしくするの」

「だつてここ狭いんだ」ピョートルが苦情を言つた。

「だつたら譲り合いなさい。黙つて！」女は建物の四階を見上げた。ミィシャの部屋のほうを。

「なにまつてるの？」アレクセイが尋ねる。

「グリゴリーよ。書類に署名してるとこ」

「ただなかかるの？」

女は坐り直し、まっすぐ前を見た。「長くはないわ」

危ないとこだった、とグリゴリーは、アレクセイという少年が改めて部屋を出、ドアを叩きつけていくや思つた。あのガキが飛び込んでくるのがもう一秒遅かつたら、やばいことになつてた。ナディヤのばかは何してるんだ、ガキを戻つてこさせたりして。ナディヤを使うことには最初から反対だった。だのにルーペンのやつが女を使えと言ひ張つた。女なら信用されるからと。

少年の足音が階段を遠ざかり、どたどたという大きな音に続いて、建物の表ドアがぱたんと閉まつた。

グリゴリーはポン引きのほうに向き直つた。

ミィシャは窓辺に立ち、通りを、自分の四人の少年たちが坐つてゐる車をじつと見下ろしてゐた。太い指を別れの挨拶に捻げ、手をガラスに押し当てる。グリゴリーに顔を戻した時には、眼を実際にうるませてさへいた。

にもかかわらず、最初に口にしたのは金のこと。

「靴の中か？」

「ああ」

「全額？」

「米ドルで二万。子供一人につき五千だ。値段には同意したはずだぞ」

「そうだな」ミーシャはためいきをつき、顔を手でこすった。顔に刻まれた畝^{うね}が、ウオッカの飲み過ぎ、煙草の吸い過ぎの効果を実に物語っている。「ちゃんとした家庭と養子縁組できるんだらうな?」

「ナディアがきちんとするさ。子供が大好きなんだ。だからこの仕事を選んだ」

ミーシャは何とか弱々しく微笑んでみせた。「俺にもアメリカ人家族を見つけてくれるかもな」

グリゴリーとしては窓から引き離す必要があった。椅子の脇^{わき}の小卓に置かれた鞆^{たもと}をゆびさす。「かまわな いぜ。なんなら確かめてみる」

ミーシャは鞆のところへ行き、留め金をぱちんとはずした。中には整然と束ねられたアメリカの札が積み重ねられていた。二万ドル。肝臓が腐るほどウオッカが買える。人間の魂も今日びは安く買えるもんだ、とグリゴリーは思った。この新生ロシアの道端では、何でも取り引きできる。イスラエル産オレンジ一箱だろうが、アメリカ製のテレビだろうが、女の体を楽しむことだろうが。機会はどこにでも転がっている。こちらに引き出す才能さえあれば。

ミーシャは立ったまま、その金、自分の金を見おろしていたが、勝利の色は浮かべていなかった。むしろ

嫌悪のそれだった。鞆を閉め、硬い黒のプラスチックに両手を置いたまま、頭を垂れて立ちつくす。

その薄くなりかけた頭にグリゴリーは後ろから近づき、サイレンサーをつけたオートマティックの銃身を上^あげ、相手の脳に二発ぶち込んだ。

血と灰色の細胞が向かいの壁にしぶく。ミーシャは突っ伏し、倒れざまに小卓をひっくり返した。鞆がそばの敷物の上にどさりと落ちる。

グリゴリーは、溜まりだした血が届かないうちに鞆を拾い上げた。片側のそこかしこに人間の細胞組織が付着している。浴室に入り、プラスチックからはねを拭き取るのにトイレットペーパーを使い、トイレに流した。ミーシャが横たわる部屋に戻してみると、血溜まりは早くも床を横切り、別の敷物にしみだしていた。部屋をざっと見直し、ここでの作業が全て終わり、

何の証拠も残っていないことを確認する。ウオッカの壺^{つぼ}をもらっていく誘惑に駆られたが、やめることに決めた。ミーシャの大事な酒壺をなぜ持っているのか、説明するはめになるだろうし、グリゴリーは子供の質問には我慢のならないたちだ。それはナディアの担当フラットを出て階下におりる。

ナディアは託された子供たちと車の中で待っていた。

グリゴーリが運転席に迂り込むと、明らかに問いかける眼で見た。

「書類に全部、署名してきた？」と尋ねた。

「ああ。全部」

ナディヤははつきり聞き取れるほど大きく安堵のためいきをついて坐り直した。こんな仕事をする度胸はないんだ、とグリゴーリはエンジンをかけながら思った。ルーベンが何と言おうと、この女は足手まとい。

後ろの座席でこそ音を聞いた。リアミラーを一瞥すると、少年たちが互いに押し合っていた。一番小柄なヤーコフだけは別で、まっすぐ前を見ている。ミラーの中で視線が合い、グリゴーリは、子供の顔から大人の眼が覗いているような無気味な感覚に襲われた。

だがすぐに少年は顔を背け、隣の少年の肩を叩いた。と思うや、後部座席はうごめく体とばたつく手足のもつれ合いと化した。

「いい子にしてください！」ナディヤが言った。「静かにできないの？ リガまでは長いだよ」

少年たちは落ち着いた。一瞬、後部座席がしんとする。だがリアミラーを見ていたグリゴーリは、小柄な少年、大人の眼をした少年が、隣の子を肘でこづくのを眼にした。

思わず頬を緩めた。心配することは何もないと思った。何といつても、たかが子供。

時刻は真夜中、カレン・テリオは眼を開けておくのに必死だった。道路をはずれまいと。

この二日間、ほとんど運転しづめた。ドロシイ伯母の葬儀が終わってすぐに出発し、短い仮眠をとり、ハンバーガーとコーヒー——特にコーヒーを口に入れる間しか車をとめていない。伯母の葬儀は遠ざかり、二日たった記憶のぼやけた塊にすぎなくなっている。萎れかけたラジオオラス。名前もわからない従兄弟たち。ばさばさの細いサンドイッチ。義理。多すぎるほどの義理。

今はひたすらうちに戻りたかった。

先へ進む前にどこかに駐車してもう一度、軽く仮眠すべきなのはわかっていたが、もうすぐそこのだ。ボストンまではたった五〇マイル。最後に寄ったダン

キン・ドーナツで、コーヒーをさらに三杯補給した。役に立った。少しだけ。スプリングフィールドからスターブリッジまで行き着くだけの元気を与えてくれた。だが今やカフェインの効果は薄れかけ、自分では起きているつもりでも、時々頭がこくつと垂れ、たった一秒とはいえ、眠ってしまったことに気づかされている。バーガー・キングの看板が行く手の闇から差し招いていた。ハイウェイをおりる。

中に入るとコーヒーとブルーベリー・マフィンを注文し、テーブルに着いた。夜のそんな時間とあって食堂にはわずかな客しかおらず、全員が同じように疲れた蒼白い仮面を被っていた。ハイウェイの亡霊だわ、とカレンは思った。どのハイウェイ休憩所にもたむろしている疲れた魂たち。食堂の中は気味が悪いほど静かで、誰もが眠気を我慢し、道に戻ることだけに集中していた。

隣のテーブルには幼児を二人連れた憂鬱そうな女がいたが、子供は二人とも静かにクッキーをもぐもぐやっていた。実におとなしく、実に色の白い子供の姿に、カレンは自分の娘たちを思い出させられた。明日は二人の誕生日だ。ベッドで眠っている今夜から、十三になるまではたった一日。また一日、子供でなくなるの